

「理性」と「関係」：パスカルの思考を手がかりとして

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部一般教育助教授

<https://doi.org/10.15017/142>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 11, pp.55-63, 1984-03-01. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：



「理性」と「関係」

— パスカルの思考を手がかりとして —

上 田 富美子*

La raison et le rapport selon Pascal

Fumiko Ueda

人知について語りはじめると、私たちはカントが指摘したような迷妄の中に踏み迷い、¹⁾ 一篇のフィクションを構築することにもなりかねない。それはおそらく人知の本性に由来することでもあり、自らが深くその中に取り込まれているものこそが、最も把握しがたいということにもよるであろう。自己がそこに依拠し、そこに成立の基盤をもつものを改めて取り出そうとすれば、一個の夢幻をつかまされてしまうという事態は皮肉といえ余りに皮肉である。だからこそすべてを知るものは予め禁忌を設けて、そこに近付くことを許そうとしなかったのでもあろうか。²⁾

だがすでに禁断の木の実を食され、食したものはそこにこそ憧れゆく。知を以て知の本源に迫りゆくことが可能であるかのように。このウロボロスの行為³⁾ はしかし、知を委ねられた人間の免れがたい宿命であるのだろう。多くの先達がそれゆえにこそこの道を歩み、可能と不可能の際に立った。アポリアの彼方から彼等の聞き取ったものが何であったか、それが少なくとも幻聴でない限り、私たちは耳をかす必要がある。なぜならそのものについて完知しうだけの力は私たちに与えられておらず、にもかかわらず私たちが等しく人間である以上、彼等とともにそこへといざなわれゆくほかないからである。

したがってこの問題についての考察は程度の差こそあれ、しょせん仮説を提示するにほかならないことになろう。私たちにその域を超え出することは不可能である。ただパスカルというすぐれた先達の助力を得て、迷妄の淵に完全に沈み入ることのないようねがうばかりである。そこでこの小論は先立つ論稿⁴⁾ と主題を等しくしながらも、観点に多少の相違を見ることになるはずである。

1

パスカルは小論「幾何学的精神について」(De l'esprit géométrique)において、「幾何学的精神」すなわち「理性」(raison)の「真の方法」(véritable méthode)は徹底した「論証」(démonstration)にあるとし、それは「あらゆる用語(terme)を定義し(définir)、あらゆる命題(proposition)を証明する(démontrer)ことである」⁵⁾ と規定している。だが続いてその可能は否定される。「確かにこの方法は立派(beau)には違いないが、絶対的に不可能(absolument impossible)である。なぜかといえば、最初の用語(le premier terme)を定義しようとする、それを説明するのに用いる、それに先行する(précédent)用語を予想(supposer)させるであろうし、同様に最初の命題を証明しようとする、それに先行する他の命題を予想させるであろうことは、明白(évident)であるから。そのようにして最初のもの(le premier)に決して到達(arriver)

*九州大学医療技術短期大学部一般教育助教授

「理性」と「関係」—パスカルの思考を手がかりとして—

しないであろうことは明らか (claire) である」⁶⁾ すなわち「理性」(raison)の本性は「定義」(définir)・「論証」(démontrer)にあり、⁷⁾ 「理性」はその貫徹を目指して歩みを進めるが、自らの力では「最初のもの」(le premier)に出会うことがないため、その目的を達しえないことがここでは示される。だがそれは「定義」・「論証」をこととする「理性」の本性自体からして当然のことと言える。なぜなら、「定義」・「論証」の機能は、定義論証される究極のものが与えられなくてはその力を発揮することはできないからであり、またそれを与えることは、もっぱら「定義」・「論証」にのみたずさわる「理性」にとって到底不可能なことだからである。それは「理性」の能力を超え、別のレベルのことに属する。したがって、もしそれがもたらされるとすれば、別のところからでなければならぬであろうが、ともかくパスカルの語るところを聞こう。

「それゆえに、探求 (recherche) をいよいよ押し進める (pousser) ことによって、もはや定義することができない始元的な語 (mot primitif) と、その証明 (preuve) に役立つのにそれ以上明白 (claire) なものは見出しえないほどの原理 (principe) とに必然的に (nécessairement) 到達する (arriver)」⁸⁾ とここでここにいわゆる「到達」(arriver)は、さきの引用で「最初のもの」に決して「到達」しないとされた時の「到達」とは、その意味を異にしていることは明確であろう。さきの場合、「定義」・「論証」という「理性」の機能による「到達」が想定されていたのに対し、ここでは「もはや定義することができない始元的な語に……到達する」(傍線筆者)という言葉から判明するように、その「到達」は「定義」・「論証」を超えたところでなされているからである。すなわちここにいわゆる「到達」は、本来の「理性」機能の外でなされていると見なければならぬ。したがって、これら二つの叙述に矛盾はない。たださきに「最初のもの」(le premier)と言われたものが、ここでは「原理」(principe)と言い換えられているのは注意を

要する点であろう。⁹⁾ ともかく「理性」はもや「定義」できない行きどまり¹⁰⁾に遭遇し、それがここでは「原理」として設定されているのである。この点に関しききの引用の部分と併せ考えれば、「理性」それ自身による貫徹はどこかで不可能となり、それを補うものとしてどうしても別に「原理」が必要とされるということであろう。では「原理」は、定義論証という本来の「理性」機能によってでなければ、一たい何によって与えられるのであろうか。

「ここに一つの、それは幾何学の秩序 (ordre de la géométrie) であるが、説得力の足りない点では実際劣っているが、確実性の足りない点では劣っていない秩序がある。それは一切のものを定義する (définir) ことも、一切のものを証明する (prouver) こともしない。その点において、それは完結したものに劣っている。だが、それは自然光 (lumière naturelle) に照らして明白 (claire) で不変な (constant) ことがらしか仮設 (supposer) しない。であるから、それは完全に真実 (parfaitement véritable) であり、自然 (nature) が論述 (discours) に代って (au défaut de)、それを支える (soutenir) ののである」¹¹⁾ すなわちここにおいて、「理性」機能を補うものが何であるかが明示される。それは「自然光」(lumière naturelle)であり、さらには「自然」(nature)と呼ばれているものである。してみると、さきにいわゆる「原理」は論述的「理性」にではなくて、「自然」にこそ依拠するものと言わなくてはならないだろう。ところで「自然」とはまさに、私たちの外なるものの総称ではないだろうか。それは実際、「原理」の代表的なものとして、「空間」(espace), 「時間」(temps), 「運動」(mouvement)など、いずれも外界の基本的構成要因をなすものが挙げられていることからしても明らかであろう。¹²⁾ だからこそまた、これら「原理」は同時に「対象」(objet)とも呼ばれているのに違いない。¹³⁾ では「原理」には、一たいどんな特徴が見出せるのであろうか。

「どんなに大きな空間 (espace) であっても、それ以上に大きい (grand) ものを考えること

上 田 富美子

ができるし、さらにそれ以上のものを考えて、際限なく（à l'infini）行っても、もはや増加（augmenter）されないような大きさに達する（arriver）ことはない。それに反して、どんなに小さい（petit）空間であっても、さらに小さいものを考えることができるし、たえず際限なく行っても、もはや少しの広がり（étendue）もないような不可分な（indivisible）ものに達することはない。／時間（temps）についても同様である。人々はつねに果てしなく（sans dernier）より長い時間を考えることができるし、またより短い時間を考えることもできる。しかも一つの瞬間（instant）、または純粹な無時間（pure néant de durée）に達することはないのである¹⁴⁾（斜線は原文中の替行を示す）さらに「どんなに早い（prompt）運動（mouvement）であっても、それ以上のものを考えることができるし、あとのものをさらに早めて（hâter）、たえず際限なく（à l'infini）続けても、これ以上は増加する（ajouter）ことはできないという早さに達する（arriver）ことはない。それに反してどんなにのろい（lent）運動であっても、それ以下にゆるめる（retarder）ことができるし、あとのものをさらにゆるめて際限なく続けても、他の無限ののろさ（lenteur）に下ってゆく（descendre）ことができないようなのろさに達し、休止（repos）に陥ることはない¹⁵⁾」すなわちこれらから明らかになるのは、要するに、「空間」、「時間」、「運動」などで示される「理性」の「原理」がいずれも「無限」（infini）であり、決して究極のものに「達する」（arriver）ことがないということであろう。そしてこのような特徴をもたらすものが、これらのものに共通する「量」（quantité）であることに私たちは気付く。パスカルは「パンセ」の中で以下のように言う。「自然（nature）は同じもの（même chose）を繰り返す（recommencer）。年（an）、日（jour）、時間（temps）、おなじように諸空間（espace）は、数（nombre）もそうだが、端（bout）と端とがつながりあって続いている。一種の無限（infini）、永遠（éternel）という

ようなものが、そんなふうにしてできている。何も無限なもの永遠なものがあるのではない。かすかすの有限なもの（être terminé）があつて、それが無限にふえてゆく（se multiplier）のである。したがってただそれら有限なものを増加せしめてゆく数のみが無限である、私にはそう思われる」（121-663¹⁶⁾傍点筆者）すなわちここには、これら無限連続性が、「数量」の特徴であることが明示されているのである。

だが私たちは、これら「原理」の特性をこのようなものとして認識する時、ある困惑をおぼえざるをえない。というのは、これら「空間」、「時間」、「運動」などについての叙述は、すでに述べた類似の叙述をただちに想起せしめずにはおかないからである。それはすなわち、1の冒頭に挙げた「理性」の本来的機能についての叙述である。そこでは、「定義」・「論証」をこととする「理性」は決して「最初のもの」（le premier）に「達する」（arriver）ことがないと言われていた。だからこそ、「自然的光」（lumière naturelle）が、「自然」（nature）が、論証の能力たる「理性」に「代って」（au default de）その役割を果してくれることをひそかに期待したのではなかったか。だがこれら「自然的光」によって与えられた「原理」（principe）の特性が結局「数量」的なものに統括され、無限増大、無限分割の中に分散してしまうというのであれば、ここにおいても結局「最初のもの」、究極のものは見出されなかったと言うべきではないのだろうか。いやむしろ事態自身に視点を当てる限り、ここには最初の場合と何らの変化も進展も生じていないようにさえ見受けられる。これは一たいどう解すればいいのだろうか。

しかしながら、目を現象面に固着させることなく事柄そのものに転ずるならば、そこに相違があることもまた明確である。というのは、はじめの場合は定義論証の「理性」機能が問題とされたのに対して、後の場合は「理性」の「原理」、換言すれば「自然」ないし外界に深くかかわる「理性」の「対象」（objet）が問題とされているからである。では事柄の相違にもかか

「理性」と「関係」—パスカルの思考を手がかりとして—

ならず、どうして同様な結果がもたらされることになったのであろうか。これこそおそらく真に問わるべきことに違いない。

ところで1の冒頭の引用の意味するところは、「定義」・「論証」すなわち推論の機能としての「理性」は「最初のもの」(le premier)すなわち「原理」(principe)を求めて溯及を重ね、ついにこれらのものに逢着することがないというのであったが、ここにはすでに溯及即展開という考え方が前提されているように見える。なぜなら、「理性」の到達すべき究極点は、「はじめなるもの」(le premier)すなわち「原理」とも呼ばれているのであるから。そこには究極点すなわち「終りなるもの」がただちに、出発点へと逆転することへの暗黙の了解があり、出発点はほかならぬ推論の展開のはじまりを意味することになるからである。溯及と展開とは「理性」にあって、同じ推理機能の往還構造を形成している。¹⁷⁾だとすれば、「はじめなるもの」が与えられれば、これは文字通り推論の「前提」となって、そこから論証の鎖がつながれてゆくことになる。では、このような「理性」の論理的展開とは一たい何なのか。それは出発点たる「前提」すなわち「原理」の展開である限り、その範囲を逸脱するものでないことは明らかであろう。「原理」から繰り出されたおのずからなる論証の糸は「結論」を紡ぎ出す。「結論」は「前提」を超えて進み出ることには、ついにかなわない。だとすれば、問題はどうしても「原理」に帰一することになる。したがってこの点が押えられない限り、論究の進展もまたはかりようがあるまい。

2

さて「理性」の「原理」の基本的なものは、さきに見たようにすべて「自然」すなわち外界の構成要因をなすものであり、結局は「数量」に還元できるものであった。だがこれらが外界そのものを映し出すものでないことは容易に推測できるであろう。もっとも他方、それらが「自然」ないし外界そのものと何らかのかわりをもつものでないと言い切ることもまた、あま

りに僭越と言わなければならない。なぜならそれらは、「理性」の「対象」(objet)とも呼ばれることによって、その「与件」であることを明らかに示しているからである。それらはまづもって、推論的「理性」機能の外側から与えられる。それらは「理性」のいかんともしがたい「条件」である。してみるとこれら諸原理は、外界と私たちとの接点に立つものと言えはすまいか。換言すれば、それらは外界と私たちとの一つの基本的「関係」(rapport)を示すと言っているのではあるまいか。¹⁸⁾

では「関係」(rapport)とはいかなるものであろうか。パスカルは「関係」というものを取り立てて論じることをしていないが、例外的にこの問題自体に触れている箇所が、「パンセ」中の高名な「人間の不均衡」(Disproportion de l'homme)と題された断章の中に見出せる。多少長くなるが、一応その部分全体を抜粋してみたい。

「もし人間(homme)がまず第一に人間自身を研究する(étudier)としたら、それを超えてさらにさきに進む(passer outre)ことのいかに不可能であるかを知るであろう。いかにして部分(partie)が全体(tout)を知ることができようか。でも彼は少なくとも自分と釣り合い(proportion)を保っている諸部分だけでも知りたいと願うかも知れぬ。ところが世界(monde)の諸部分はお互いに(l'une avec l'autre)或る関係(rapport)或る連鎖(enchaînement)を保っており、一を知るとは他および全体をよそにしては不可能だと私は思う。／たとえば人間は人間の認識するあらゆるものと関係をもっている。彼は彼を容れる(contenir)ために場所(lieu)を必要とし、存続する(durer)ために時(temps)を必要とし、生きる(vivre)ために動き(mouvement)を必要とし、彼を組成する(composer)ために諸元素(élément)を、養う(nourrir)ために熱(chaleur)と食(aliment)とを、呼吸する(respirer)ために空気(air)を必要とする。彼は光(lumière)を見(voir)、物体(corps)を感知する(sentir)。要するに一切のものは彼と関係してくる。だか

上 田 富美子

ら人間を知ろうとするならば、なにがゆえに人間は生きる（subsister）ために空気を必要とするかを知らねばならず、空気を知ろうとするならば、なにがゆえに空気は人間の生命（vie）とかかる関係にあるかを知らねばならない、等々。／炎（flamme）は空気がないなら存在しない。したがって一（un）を知ろうとするならば、他（autre）を知らなければならぬ。／そうであるから、すべてのものは因（causant）であり果（causé）であり、助け（aider）、助けられ（aidé）、直接的（immediant）であり間接的（médiant）であり、いかにへだたったもの（éloigné）、いかに異なったもの（différent）をも結ぶ（lier）自然的（naturel）で、感知されない（insensible）綱（lien）でつながれている（s'entretenir）のであるから、全体を知ることなくして部分を知ることが不可能であり、部分をくわしく知ることなくして全体を知ることが不可能であると私は思う」（72-199 斜線は原文中の替行を示す）

ここでまず確認されなければならないのは、「関係」（rapport）が「人間」（homme）を措いてはありえないこと、またそうであるならば当然、「認識」（connaître）を抜きにしてはありえないということであろう。私たち人間を中心にして「世界」（monde）は一つの「関係」の網として捉えられる。「関係」は「関係」を呼び、それはまた新たな「関係」を呼び、こうしてその「連鎖」はいかに「へだたったもの」（éloigné）、いかに「異なったもの」（différent）をもつないで、「全体」（tout）すなわち「世界」規模に及ぼうとする。だが「関係」の「連鎖」がとれほど拡大されようとも、それはまず二つの事柄の間において成立するのであり、ここにこそ「関係」の基本があると見て差し支えないであろう。そこで「関係」について何らかの見通しを得るためには、私たちはまずこの点を押えてかからなければならぬ。

ところでその手がかりは、上記引用中「人間を知ろうとするならば、なにがゆえに人間は生きる（subsister）ために空気（air）を必要とするかを知らねばならず、空気を知ろうとする

ならば、なにがゆえに空気は人間の生命（vie）とかかる関係（rapport）にあるかを知らねばならない」という叙述の中に見出せる。ここには二つの事柄の間における相互性の指摘がある。そのことは「世界の諸部分はお互いに（l'une avec l'autre）或る関係或る連鎖を保っており……」（傍点筆者）と言われた時に、すでに予定されていたことでもあった。たしかに連鎖は相互的であるよりはかありようはない。それはまた、「一」（un）と「他」（autre）、「因」（causant）と「果」（causé）との間にも適用され、結局、「全体」（tout）を知ることなくして部分（partie）を知ることが不可能であり、部分をくわしく知ることなくして全体を知ることが不可能であると私は思う」という言葉に総括される。これらのことは、私たちにある別の断章をも想起せしめる。すなわち、「知性（esprit）と直観（sentiment）とは会話（conversation）によって作りあげられる。また会話によってそこなわれる。だからよい会話は知性と直観とを作りあげ、悪い会話は知性と直観とをそこなう。したがってこれらを作りあげこれらをそこなわずにいるためには、よく選び（choisir）うることが何より大切である。ところでこれらをすでに作りあげてい、そこなわずにいてこそ、選ぶということ（choix）をすることはできる。こうしてそれは循環（cercle）する、この循環から逃れ出る人々は幸福である」（6-814）ここでは別の主題が論じられ、「関係」という言葉自身が用いられているわけではないが、事態は上記引用中の場合とほとんど変わらないことが見て取れるであろう。パスカルはこの「関係」を「循環」（cercle）と呼んでいるが、その基本をなすものはむしろ相互的なものと見なして差し支えあるまい。

では「関係」の相互性とは、一たい何であろうか。上に挙げられた「人間」と「空気」、「一」と「他」、「全体」と「部分」などの例からも判明なように、「関係」の断面は互いに相異なったものに向き合っている。そして「関係」が「人間」を抜きにしてありえないものとする、それは終局的に「人間」対人間の外な

「理性」と「関係」—パスカルの思考を手がかりとして—

るもの、すなわち外界を指向することになる。これを「関係」の原型とするなら、相異なる両者の間に介在し、それらを結びつける「関係」というものの間接的性格が拡大したかたちで見えてくる。いやむしろ、これらの間の距離は「無限」(infini)と言ってよく、「関係」がどれほどその鎖をつないでゆこうとも、両者の一致は得られないという方が至当であろう。そしてそれはまた、言葉を換えれば、両者の相対的在り方を指し示すものでもあろう。その相対性は、「関係」の無限「連鎖」を以てしても償えるものではない。「関係」はついに絶対たりえないのである。さらに言えば、こうした特性のすべては、「関係」が別個のものとの間のそれである限り、あらゆる「関係」に適合する。なぜなら、両者間に少なくとも相違が存する以上、事態の本質に変わりはないからである。そしてそのことは、あらゆる「関係」の背後に、「人間」対外界の「関係」が下敷きされていることを暗示する。原型たる所以である。してみると、間接性、相対性、無限性などは、いずれも「関係」の本性そのものからもたらされるのであり、同じ一つの事態を言葉を換えて表現したものにすぎず、決して別々の特性を指し示すものでないことは明らかであろう。

またこのように見ることによって始めて私たちは、上記断章 72-199 中の「もし人間がまず第一に人間自身を研究するとしたら、それを超えてさらにさきへ進むことのいかに不可能であるかを知るであろう。いかにして部分が全体を知ることができようか」という言葉や、「自然的で感知されない綱 (un lien naturel et insensible)」(傍点筆者) という表現に込められた真の意味を汲み取ることができるのではないだろうか。さらに、断章 6-814 における「この循環 (cercle) を逃れ出る人々は幸福である」という反語的言い廻しについても了解を得ることができるのではあるまいか。これらはいずれも、上に述べた「関係」の本性を離れてはありえない言葉のように思えるからである。

さてここまで来て私たちは、「関係」というものが、「理性」の「原理」と言われたものや、

「理性」自身にいかに密接にかかわっているかに気付くであろう。そこで当然つぎの課題は、再びそこへ視点を移し論究をすすめることにある。

3

以上の考察を通じて私たちは、「空間」(espace), 「時間」(temps), 「運動」(mouvement)などに代表されるいわゆる「理性」の諸「原理」(principe)が、「関係」(rapport)へと直結してゆくのを拒むことができない。これらはすべて、私たち「人間」の外の「世界」(monde)すなわち外界と私たちとの、第一次的な「関係」を表象するものであろう。そしてこれら「原理」には、とりわけ「関係」の骨組自体が透けて見える。それは「関係」がそこに紡ぎ出されるための下地であり、「数量」に帰一する、いまだ無記的な「無限」(infini)で相対的な領野である。論証機能としての「理性」は、この下絵の上をなぞり推論の鎖をつないで、「関係」の幾重にも輻輳した綱の目を張りめぐらせてゆく。それは下地に見合う「無限」の営為であり、間接性の連関はいかにくり展べられようとも、「理性」をして究極の一点に立たしめはしない。だがこのように見る限り、何と「理性」は「関係」との分ちがたいかわりの中に置かれるのであろうか。私たちは今さらのごとくに古人が「理性」を《ratio》と呼び、この語には「関係」の意もまた含まれていたことに驚きを禁じえない。¹⁹⁾

「関係」についての考察はそれゆえに、「理性」のあらゆる問題について確認を与え、また新たな展望を用意することになるであろう。すなわち「理性」の「原理」が外界と私たちとの第一次的な「関係」と見られたことは、2の冒頭に述べた予想を裏付けると同時に、「理性」のとりわけて外向きな在り方を確認するものとなる。また1で触れた「原理」の「無限」への拡散のいきさつについても、同様な理由から十分了解されるところとなる。 「原理」といっても「関係」である以上、そうした特性を免れるものではないからである。だが中でも注目すべ

上 田 富美子

きは、「理性」の往還ないし循環構造の解明において「関係」的視点の果す役割である。というのは、「関係」の本質たる相互性こそ、往還を決定付ける最大の要因と見なすことができるからである。いやむしろ、「理性」が関係的でしかありえない限り、往還は「理性」にとって必然的ときえ言っていに違いない。しかもそれは当然、いずれの側においても「無限」であろう。したがって「原理」を求めての「理性」の溯源の歩みも無限ならば、「原理」を起点とするその展開の歩みも等しく無限となる。それは基本的には、私たち人間と外界との間に存する同じ一つの「関係」という事態を指向しており、本来別のことではないに相違ない。そしてこのことはまた、同じく1の末尾に提示した「理性」の在り方についての予想的見解を裏付けるものでもある。

以上私たちは「理性」の論究を通じて、おのずから「関係」の領野に引き出されることになったが、それは「理性」と「関係」との抜きさしがたい密接なかかわりを示唆するとともに、人間の基本的在り方を指し示すものと言うことができる。なぜなら、それはまさに私たちと「世界」との原初的出会いにかかわるからであり、それを措いて私たちの在りようもないからである²⁰⁾。だが「世界」がまず「関係」として与えられることは、私たちを相対の中に置くこととなり、私たちを取り巻き私たちの手にするすべてのものが「無限」の影を帯びて立ち現われることにもなる。それはたしかに人間特有の無限の努力を招来し、「文化」(culture)や「学問」(science)などの限りない発展をもたらす要因となったに違いない。しかしながらそれは他方において、人間に不可避的な深刻な問題を突きつけずにはおかないであろう。パスカルは無論その点を見落してはいない。それはある意味でこの小論の結びとするに最もふさわしいものとも言える。そこで以下この点について考察をはかり、結論に代えたいと思う。

その一つの重要な問題は、さきに触れた「人間の不均衡」の章(72-199)に見出せる。ここで「関係」の軸は「大」(grandeur)と「小」

(petitesse)の対峙する二方向の「無限」として提示されるが、これはまさに、上記の相互性という「関係」の本質に由来する「理性」の往還構造を、両開きにしたかたちとも言うてよく、「関係」の基本的モデルと見ることができるであろう。「関係」の中の存在として「人間」(homme)はその只中に投げ入れられざるをえないが、その時いかなる事態が生起することになるのであろうか。パスカルは言う。「我々は絶えず定めなく浮びつつ、一つの端(bout)から他の端へと押しやられて空漠たる中間(un milieu vaste)に漂う。いずれかの端に自分をつないで落ちつこうとすると、そこはゆらいで離れてゆき、追えば手をのがれてすべり去り、どこまでも逃げる。何ものも我々のためにじっとしていてくれない」(72-199) ここには「関係」の相対の中で翻弄され、定点を得られないまま、永遠のさすらいの中に放置される人間の姿が写し出される。私たちが関係的な在り方を免れない以上、ここに指摘された「不安定」(inconstance)もまた、人間存在の根底深くにつながれた一つの不可避的な在り方をたしかに指し示している。

だが他方、「関係」の中に置かれた私たち人間は、単に両無限の間をあてどもなく漂い続けるばかりでなく、一方の「無限」の側にきりもなく誘い込まれる可能性をももつ。一方向性のみを深追いすることによって人はいよいよ起点をはずれ、迷妄の中に踏み迷い帰路を失う。だがこのような在り方が、相互性という「関係」の基本構造そのものに背くことは明らかであろう。パスカルはこの矛盾的行為を「狂気」(folie)(378-518)または「誤謬」(faute)(863-443)と呼んだ。しかしながら、これら「狂気」や「誤謬」もまた、上述のような無限のさすらいを避けんがために人間がとりうる唯一可能な行為とも見られ、その意味ではまことに根源的なものと言わざるをえない。「人間」(homme)は必然的に(nécessairement)狂人(fou)である。狂人でないことは一つのほかのかたちにおいて狂人であることになるほど、それほどにも必然的に狂人である」(414-412)

「理性」と「関係」—パスカルの思考を手がかりとして—

というパスカルの言葉は、人間の深部を鋭く射当てている。

さて以上を通じて明るみにもたらされるのは、人間のとりわけて危機的な構造であろう。人はついに自己を見出すことの無い永久のますらいのうちにいるのでなければ、果てしのない迷妄の中に転落して自己を見失う。人間で在ることよりも人間でないことの方がむしろ容易であるとは、人間は何という存在なのであろうか。

「人間で在る」ことこそが、人間にとって永遠の課題になるというのであろうか。だがそれらはすべて等しく、私たちが関係的であり理性的であることに基づいている。それよりほかに私たちの在りようはなく、そこをはずして私たちの生存の場所はありません。ではそこにおいて「人間」であり続けるためには、私たちはどうすればいいのだろうか。

パスカルは言う。「精神の極端なもの (extrême) は狂気 (folie) として非難される。……中位のところ (médiocrité) だけがよい。……中間 (milieu) をはずれることは人間性 (humanité) をはずれることである」(378-518) また、「誰しも、一つの真理 (vérité) を追求すればするほどいよいよ危険な誤りに迷い入る。彼等の誤り (faute) は一つの偽り (fausseté) を追求することにあるのではなく、反って、もう一つの真理 (une autre vérité) を追求しないことにある」(863-443) それは結局言葉の真の意味での「バランス」ということに帰一する。私たちに「絶対」は与えられないのであるから、相対の領野の中で辛うじて平衡を保つところにこそ、私たちの正しさのすべては懸けられるということになるのであろうか。パスカルは文字通り「秤」(balance) の比喻をかりて、私たちの身に備わるバランス感覚を指摘してくれてもいる。「自然 (nature) は、我々をじつによく中間 (milieu) にすえたから、秤 (balance) の一方を変えると他方も変る。……このことから私は考えさせられる、我々の頭 (tête) の中には、一方 (l'un) に触れる (toucher) とその反対の方 (le contraire) にも触れることになるような発条 (ressort) ^{ばね}

がある」(70-519) だがこの断章がパスカル自身の手で後から消されていることによっても、その困難性は推測に難くない。私たちはそれでもなお、その一点を求め続けなければならない、求め続けることにこそ人間であることの唯一の証はあると言うことができるのかもしれない。

先立つ論稿で「理性」を論じ、今回「関係」を通じて再びそれを顧慮することによって改めて確認されたことは、しよせん私たちはその外に立つことは不可能であるということであろう。したがって私たちにとっては「関係」の網の中にすくい取られ、「理性」の内に閉ざされた「世界」こそがすべてであり、絶対であると言うことができる。だがこの私たちに懸けられた類的な限界はむしろ独善の源ともなり、上述のような「狂気」や迷妄を生み、そのバランスを敢えて突き崩し、限界の外にまで至ろうとする矛盾した企てを生む。それを進歩発展と錯覚する幻想が、その行為にさらにまた拍車をかけたことも否めない。だが関係的・理性的である私たちの在り方は、あくまで私たちの類に固有なものであり、その特異性を普遍性にまで押し広げることは許されないだろう。内での普遍性が外での普遍性に直ちに直結しないことは、言うまでもないことだからである。そしてこれら類としての限界を超えた行為の果てが、やがて類の破滅へとつながらないとは誰にも確言できないだろう。この世紀末に至り、パスカルの声がいよいよ重く深く心に沈む思いがするのを私たちは否定することができない。均衡を保つもう一つの「発条」を、私たちは人類の生存を賭けて探し求めなければならないのではあるまいか。

〔註〕

- 1) I. Kant, *Vorrede und die transzendente Dialektik*, K. d. r. V.
- 2) 旧約聖書「創世記」第2章
- 3) ウロボロス (自らの尾を呑み込んで円状をなしている蛇) は普通「カオス」の状態を象徴するものとされるが、ここでは自らが自ら

上 田 富美子

- を食むという事態の方を強調するために用いた。
- 4) 短大紀要 第10号「理性について」
 - 5) *De l'esprit géométrique*, ed. Pléiade, p. 578.
 - 6) *Ibid.*, p. 578.
 - 7) 旧稿(短大紀要 第10号「理性について」)では「理性」を「原理」を含めて広義に解したが、ここでは一応、それを「定義」・「論証」すなわち「推理」の機能と狭義に解することから論を進めたい。
 - 8) *op. cit.*, pp. 578 - 579.
 - 9) 「原理」に相当するラテン語は *principium* であり、これはとりも直さず「最初のもの」を意味する。
 - 10) 「原理」が行きどまりであることを示す言葉としては、「この学(幾何学)は第一の既知の真理(*vérité*)に到達する(*arriver*)と、そこで立ちどまり(*s'arrêter*)、それらの真理を証明する(*prouver*)さらに明白なものがないところから、人々がそれらを真理として認める(*accorder*)ことを要求する」(傍点筆者, *Ibid.*, p. 582)が挙げられる。
 - 11) *Ibid.*, p. 579.
 - 12) *Ibid.*, p. 579.
なお「時間」(*temps*)が外界構成の基本的要因であることについては、短大紀要 第10号「理性について」33頁〔註〕7)参照
 - 13) *Ibid.*, p. 583.
 - 14) *Ibid.*, p. 584.
 - 15) *Ibid.*, p. 584.
 - 16) 最初の数字はブランシュヴィク版「パンセ」の断章番号を、後のそれはラフュマ版のそれを示す。以下引用の場合はこれにならう。
 - 17) 短大紀要 第10号「理性について」24頁参照
 - 18) 「パンセ」断章 233 - 418 には、これら諸「原理」と外界との密接な関係を、「身体」(*corps*)の媒介によって提示しようとした興味深い見解が見出せる。
 - 19) 「理性」のもとの語はラテン語の *ratio* であり、これは元来の語義「計算」から発して、「関係」をも意味するものとなった。
 - 20) 短大紀要 第10号「理性について」26頁参照